障害理解を通して「思いやり」を学ぶ

3年5組2番上田夏甫

１．はじめに

私が障害というテーマについて調べることに至った動機は、私の小・中学校時代の同級生が発達障害で、その子と学校生活を過ごす中で障害のある人との関わり方に疑問を持ったことだ。特に小学校低学年の時に、その子が誰かに馬鹿にされたり、変な視線を向けられているといった光景に大きな違和感を感じることが多々あった。しかし、中学校に上がっても状況は変わらなかった。高校生になって、様々な人権問題について学ぶ中で、小学校時代の違和感が自分が思っていたより深刻であったと感じるようになった。そこで、当時は違和感に留まっていたことが、今ならより深く出来事の原因や障害のある人との関わり方について考えることができるのではないかと思った。その思いが私の探求のきっかけである。学校生活においての障害のある人との関わり、その中で特にいじめが自分の思う問題に関連していると思い、それらについて調べた。

２．序論

文部科学省の「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」によると、小・中・高等学校及び特別支援学校のいじめの認知件数は平成27年度の約15万件から著しい増加傾向にあり、令和2年度では約42万件と3倍近く増加していて、その数の8割以上が小学校で起きている。平成二十五年度にいじめの定義が変更されて、いじめの初期段階を含めて、いじめと捉える範囲の拡大が認知件数の増加に影響しているが、定義変更後もグラフは右肩上がりに増加している。

まず始めに、文部科学省「いじめの現状について」によると、小学校内では、令和2年度のいじめの件数は、1年生は約8万1千件、2年生は約8万4千件、3年生は約7万8千件、4年生は約7万1千件と、2年生時が最も多く、そこから年齢を重ねるにつれて段々と減少している。二年生時がいじめのピークとなっている。文部科学省「いじめ対策Q&A」によればいじめの大きな原因としては、生徒たちはストレスの多い環境で生活していて、その発散をいじめに向けてしまうことが挙げられる。しかしこれらは、対人関係の適切な接し方や欲求不満耐性の習得、協調性や思いやり、成就感や満足感をしっかりと身に付けていれば、もしくはそれらを身につけられる教育が施されていれば防げるものである。しかし、同じく文部科学省の「いじめの現状について」によると、いじめの件数は平成27年度は約15万件、平成28年度は約23万件、平成29年度は約31万件、そして令和2年度では42万件となっている。なぜいじめの数は年々増加傾向にあるのだろうか。いじめが起こる場所は学校であるため、いじめと教育には関連性があると考えた。小学校ではいじめに関する授業はないが、障害のある人に対しての配慮や思いやりを育む障害理解教育がある。本当にその授業で思いやりを学べていたら、いじめはこれほど増加しないと思う。

そこで私は障害理解教育は障害のある人に焦点を当てているため、小学生が根本的な他人への思いやりまで深く理解できていないのではないかと仮説を立てた。そのために障害理解教育の現状を先行研究から分析し、得られた結果から障害理解教育と生徒の関連性を調べる。

３．本論

障害理解教育は様々な障害について学ぶ授業であり、小学校・中学校の道徳や総合の時間に行われる。いじめが増えている現代の学校生活において、私はこの授業が始めに述べた障害を持つ人との関わり方や、協調性、対人関係、人への思いやりを学び、障害理解だけでなく、人との良好なコミュニケーションを促進し、いじめを減らす可能性のあるものだと考えている。私が小学生の頃は、身体障害に関する授業を受けたが、発達障害のように目に見えない種類の障害の授業はなかったため、その授業があまり行われていないのかと感じた。

田名部沙織・細谷一博（2017).「障害理解教育の変遷と今後の課題」によると、小学校の障害理解を促す授業で最も取り扱われている障害の種類は聴覚障害で35%、その次に多いものが20%で聴覚障害、知的障害、15%で発達障害、10%で肢体不自由となっている。結果からわかるように、目に見えない障害(発達障害・知的障害・精神障害など)の授業は身体障害の授業に比べて少ないことがわかる。その理由として大きく二つの理由が考えられる。

大きく二つあり、一つは生徒に理解力が必要で、身体障害の車椅子体験やアイマスク体験のような疑似体験を行えず、生徒たちに理解しやすい授業にするのが難しいからである。障害のある人の感覚を理解し、自分とは異なる人がいることを知り、どういった援助が必要かと学ぶことは簡単ではない。それと違い、身体障害の授業は擬似体験を行うことができ、実施数が多くなっているのだと考えられる。二つ目は障害のある生徒への配慮が難しいことである。例えば授業後にクラスの友達から冷やかされる可能性があり、授業を行う中での表現で、その生徒を具体的に表してしまう表現を避けなければならない。このように配慮の難しさがあるため、発達障害の授業が行われにくいと思われる。しかし、田名部沙織・細谷一博(2017).「障害理解教育の変遷と今後の課題」では、知的障害と発達障害の授業実施数は2006年から2010年の実施数と2011年から2016年のものとを比較するとそれぞれ約3%から5%の増加傾向にある。このデータから近年の障害理解教育の意識が全体的に変わってきていることがわかる。ただ目に見えない障害の授業を増やすのではなく、他の種の障害とのバランスが均等になるように考えられているのではないかと思う。これからも改善が見込まれるだろう。

ただ障害理解教育といじめの減少を繋げるにはどのような意識が必要なのだろうか。これに関してはこれから調査していきたい。

４．結論

以上述べてきたように、障害者理解に関わる、特にいじめについて考察した。調べた結果、目に見えない障害理解教育の実施数は年々増加している。しかしいじめの状況は私が小学生の頃と変わらず、むしろ増加している。そして単純にこの２つの傾向を見る限りでは、両者の関連性はほとんどないように思われ、障害理解教育がいじめの減少につながるのではないかという私の考えは適切ではないことがわかった。しかし、障害理解にはいじめの改善に繋がる鍵があるのではないだろうか。それは共生社会を実現するために、それぞれの障害の特性を理解し人々が互いに人格と個性を尊重し合うという思いやりだ。

対して、いじめというのは既に書いたように生徒のストレスが原因である。もちろんそれだけではなく、友達とうまくいかないことがあるのかもしれない。ストレスに関しては、環境が原因でもあり自ら変えることは難しいと思うが、友達とのトラブルは方法次第では自らの手で解決できる可能性があると思います。文部科学省の「いじめの現状について」によると、令和2年度のいじめの件数は小学校は約42万件、中学校は約8万件、高校では約1万3千件となっている。このように中学校そして高校に上がるにつれて、いじめの認知件数が減少しているのは、問題解決能力もしくはそれが起きないような選択ができるように成長しているからだろう。そのため生徒間のトラブルが起きやすい小学校においては、障害理解の意識を障害のある人だけではなく全ての人に持てるようになることが必要である。

そのために障害理解教育の根本である相互理解や思いやりという部分を意識し、いじめが起こらないよう行動できればいじめは改善に向かって行くと考える。

５．おわりに

「人権～みんな違って、みんなで支え合う～」というゼミの授業で、様々な人権問題の学びを通して、自分の考え方が大きく変わった。世界には、人種差別やジェンダーなどの問題があり、表面的な既存の知識では理解できないものばかりなことを知った。そのため、問題について考える前に積極的に背景にあることを調べるようになり、知らないで判断することがないようになった。その影響で、誰かの異なる意見を聞いても自然と受け入れることができるような寛容な考え方になったと思う。そして学ぶことの大切さに気付いた。これからは障害理解教育について調べて分かった思いやりを日常生活において心掛け、誰に対しても寛容で相手のことを理解するために、学びを続けていきたい。

６．参考文献・出典

「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」. 文部科学省.

初等中等教育局　児童生徒課(2021) 令和2年度文部科学省「いじめの現状について」. 文部科学省.

「いじめ対策Q&A」. 文部科学省.

田名部沙織・細谷一博(2017).「障害理解教育の変遷と今後の課題」北海道教育大学紀要. 教育科学編, 67(2):93-104, 第67巻第2号, pp. 100-101」